

## 報告書

横山貴一

2025年12月

前回の報告書で、次回は研究についてより触れさせていただく予定である旨を記載しました。しかし、現在高い割合を占めている授業や生活について記載させていただいた方が、今後博士課程に進学される方々の参考になると思い直しました。今回の報告書では一年目のはじめの学期の生活の概要を記載しようと思います。研究についてはより進捗が生まれ、書くネタが尽きてきた頃に詳しく書こうと思います。

### 1. 生活について

私は現在米国メリーランド州ボルチモアにあるジョンズ・ホプキンス大学で博士課程の一年目をしています。居住前には治安の悪さを各所から心配されていましたが、実際に住んでみて、確かに安全ではないが、住みづらい街でもないという感想をもっています。四ヶ月程度住んだ現在、頻繁に外出していますが、いまだに（致命的に）危険な目には遭っていません。ブロックが変わるとかなり雰囲気が変わるということ、大半の犯罪は夜、知人同士のトラブルで起きているということに気をつけることが重要なのではないかと思います。

生活圏としては、メディカルキャンパスの位置する東ボルチモアと自宅の往復と、休みの日には友人と湾沿いでしばしば開催される催し物や、友人宅、郊外に遠出する日々を過ごしています。ホプキンスでは自前のシャトルサービスが走っており、移動では主にそれらを利用しています。週末にラボに行く際もこれらの手段で通勤できます。そのほかにも、オンデマンドで呼べる大学が提供する配車サービスも利用できるため、いまのところ車がなくても不便は感じていません。

家賃や物価は高いですが、西海岸などと比べると比較的落ち着いている印象です。食材の調達もオンラインでの注文や近所の食料品店、郊外にある大型食料品店に友人と行くことで賄うことができます。基本自炊で困ることはないです。最近友達からパンの作り方を習いました。大学からの給与と船井財団様からのご支援で生活は十分に成り立っています。

### 2. 授業について

特に必修の科目は、歴史的に著名な研究者の方々から直接講義を受けることができるという点において、非常に価値のあるものだと思います。例えば教科書に載ってい

た、あるいはその分野で毎回引用されているような有名な論文に載っていた、事実を実際に発見した方々の話を聞くことができるは貴重な経験です。カバーされる範囲も神経科学全般にわたるので、馴染みのない分野の話を聞くことができ、意外なところで自分の研究に活かせることもあるのではないかと思います。

この特定のクラスの試験は、一ヶ月に一度あり、10人ほどの講義者の講義した範囲から出題される4時間の記述式の試験です。週3回1時間から2時間ほどの講義で、内容的には、日本の医学部で学んだこととの重複も多かったため、難しさはありません。講義内容が教授によってかけ離れているので、勉強のしづらさは感じますが、落第することはほぼないのではないかと思います。友人と夜に集まって勉強することが息抜きにもなっており、全体として自分は学習内容に満足しています。

特色としては、献体を用いた脳解剖の授業があったことです。医学部でも数度経験しましたが、一度医学を学び、神経を研究し始めてから再び実際の脳をみると、違った見方ができて新鮮でした。特に辺縁系の構造を異なる断面や角度から覗くことができたことで、再び脳の神秘に魅せられました。

その他選択科目や統計の授業が次の学期から始まります。ようやく進み始めたラボの仕事と並行してこれらを捌いていくことになるので、やや負荷は上がりますが、引き続き充実した大学院生活を過ごしていきたいです。

### 3. ラボについて

私は、一年目のローテーションを行っていないため、所属ラボで研究を始めています。PIの先生と直接話し、ポスドクの方々や他の学生の方々、他のコラボレーターの先生方とも話しながらアイデアを練り、検討実験を行っています。日本では絶えず手を動かしていたため、やや手が動いていないことに不安を感じることもありますが、今まで経験があまりなかった大規模データセットや機械学習の扱い方を少しづつ学びながら、ラボの過去の仕事とスタイルに順応している最中です。

ラボの人たちは例外なく素晴らしい人格者の方々で、これはひとえにPIの先生の人柄を反映しているのだと思います。誰もが質問に常にオープンで、互いに自立した研究者たちが客観的に助言を与え合う事ができる環境が整っています。ラボは、自分を入れて博士課程以上の学生8人とポスドク3人で構成されており、全員が独立したプロジェクトを個人で走らせています。火曜日の朝は、3時間一人の方のプロジェクトについて徹底的にラボ全体で議論するラボミーティングがあり、実験デザインから細部への抜け目がない配慮を感じます。

今後のプロジェクトの発展が非常に楽しみで、期待に胸を踊らせていました。